フィッティングの文化史【明治大正期②】

靴は苦痛！ でも、注文靴をカタログでオーダー

シューフィル　城（たち）　一生（いっせい）

明治期に靴を履き始めたのは礼服着用が義務付けられた政府高官や貴族、次いで官吏や教師、そして西洋式を否応なく取り入れた軍人や学生だった。すべて好んで靴を履いたのではなく、公が定めた服制（衣服に関する制度・規則）に従って「窮屈（きう靴）袋」に足を入れ始めた形だ。

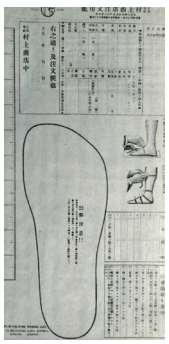
しかし、昨日まで下駄・草履を履いていた甲高幅広足に西欧人の足型の舶来靴がフィットする訳がなく、国産靴はまだ製造技術やフィッティング技術が未熟な段階であり、見た目はともかく快適な履き心地とはいかなかった。明治中期に来日したフランス人画家ビゴーの風刺画に、西洋風社交場・鹿鳴館の控室で靴を脱いでソファーに座り込む紳士淑女の図や、列車の中で靴を脱いでくつろぐ紳士などの場面がある。玄関で履き物を脱ぎ履きする“靴脱ぎ文化”が根強い湿潤な気候の国では、やはり下駄・草履のほうが快適であり、特に和装での内股歩行に慣れた女性にとってヒール歩行はかなり苦痛だったようだ。

とはいえ様々な階層・職業の服制が定められた明治中期（1890年代）以降、靴は急速に一般化する。その普及に一役買ったのが靴のカタログ販売だった。櫻組や大塚商店（製靴）を始めとしたメーカーの明治大正期のカタログには、ほぼ例外なく巻末に注文書があり、それに附随して“注文者＝消費者”が自分の足型・サイズを採寸するための方法と採寸部位を説明するイラストが掲載されている。既成靴の受注だけではなく注文靴のオーダーも受けていたのである。明治末から大正期にかけて“神田の村上”として知られた靴製造卸の村上商店などは、そのカタログでの注文を全国から受けて大躍進をしている。

しかし、今日でも難しい注文靴のオーダーを、素人計測データで本当に製造可能だったのだろうか。答えはイエス。ただし現代で言う“ジャストフィットの靴”ではなく、各メーカーの実績のある既成靴の靴型に、計測データを読み込む職人の経験と載せ甲・幅出しなどの補正技術を反映させたアバウトフィットの靴を提供していたようだ。前号でも紹介した陸軍経理研究会発行の小冊子「足と靴」（1909年刊）でも、「靴製造人は足を知らず、足の寸法を正しく計れる人も稀だが、一昔前より製造技術は良くなり少ない木型で流行の靴をつくる-----」と否定的だが、靴着用者を満足させる靴づくりは行っているとしている。当時はまだ靴のフィッティングに対する知識・感覚は未成熟であり、和装の丈合わせ的な感覚でサイズを選び、ウイズ（足幅）に関しては“大は小を兼ねる”的な日本人好みのフィット感で満足していたと思われる。



日本人の奇妙な靴履き姿なども描かれた「続ビゴー素描集」（岩波文庫）



村上商店の大正6年版カタログ・足型採寸用紙



大塚製靴カタログ（明治40年版）より